

令和3年度 関係人口創出・拡大のための中間支援モデル構築に関する調査・分析業務
業務実施報告書

団体名	特定非営利活動法人プラットフォームあおもり
事業名	小さなまちで、「つい、かかわり続けたい関係人口」と、まちの案内人や地域住民とのつながりを創り出し続ける、『中間支援組織とコーディネーターを育て継ぐ』 挑戦

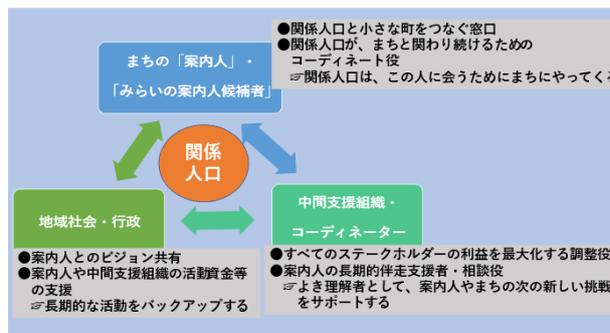
1 事業概要・主な成果

1.1 事業概要

5つの小さなまちで、中間支援組織とコーディネーターを育成することにより、常にいくつもの挑戦が生まれ続けていくサイクルを創り出すことで、関係人口と地域の人たちが、相互にリスペクトしあいながら、まちの案内人の活動を長期的で継続可能なものにし、住民自治意識の変革と、まちの誇りの醸成につなげていきます。具体的なテーマは、

- ① 地域の「かかわりしろ」を作り続ける力を支援するため、地域と案内人と中間支援組織とコーディネーターが一体となって、「かかわりしろ」をつくる実践と、その振り返りを繰り返すこと
- ② オンラインを活用し、取り組みの失敗事例や作業過程を共有することで、次のステップにつなげること
- ③ それぞれが育てあうしくみをつくることにより、前向きに課題に向き合う自立したまちをつくっていくこと
- ④ 小さなまち同士が、相互に学びあう信頼関係の構築することで、本事業終了後の横展開にむけた素地を作っていくこと

になります。



1.2 主な成果

関係人口と小さなまちがかかわりを継続していくためには、まちの中で楽しく暮らす案内人の育成と、健全な批判的視点を有する中間支援組織のコーディネート能力の向上が欠かせません。いままで多くの町村では、自分達の暮らすまちが小さいのに、町村単位でコーディネートしようと努力しすぎるあまり、魅力や課題の見方や見せ方が近視眼的になって、関係人口に対するアプローチが弱くなったり、逆に、都市部のコンサルに丸投げした結果、地域に対するリスペクトが欠如した人材を招き入れてしまったり、といった失敗事例が全国でたくさん生まれていると思います。

本事業で私達は、根っこが同じような課題を抱える小さなまち同士で計画⇔実践⇔振り返りのサイクルを繰り返すことにより、地域で暮らす案内人と、若手の案内人予備軍、地域内外の中間支援組織とコーディネーター、全体プロデューサーがチームとなって、「小さなまちに、つかかわり続けたい関係人口と、まちの案内人や地域住民とのつながりを創り出し続ける」ことを実践しました。

(1) プロジェクトの設計=自分達の暮らす小さなまちの「もったいない」に気づき、きちんと言語化することで魅力に転換する作業を、その町で暮らす人達と地域内外のコーディネーターが一緒に行ったこと

(2) プロジェクトの検証⇔交流イベント等の実践を通じて、質のよいプログラムを体験したこと

(3) 振り返りワークショップ=まちの内外のさまざまな立場の人が、多角的な視点で関与したこと

が成果目標になります。

2 モデル事業実施地域の概要と課題

2.1 事業実施地域の概要・課題

日本はいま、生産年齢人口の減少とIT環境の進化などによって、生き方や働き方モデルが大きく変化する転換期にあって、一つの仕事や一つの会社だけで働き続ける意味が見直され、地方での暮らしや、兼業や二地域居住、いま暮らしている地域以外のどこかの関係人口であることの価値や魅力がクローズアップされてきていると感じます。そして、昨年来のコロナウイルス感染症の拡大によって、その傾向に拍車がかかっています。

一方、全国各地の小さなまちでは、高齢化と人口減少が続き、基幹産業である農林水産業の担い手や地域の暮らしの担い手が不足し、日常の生活の安定に直結する「いまの目の前の課題」に対応するのが優先となってしまい、未来に向けて豊かな地域資源の活用をしたり、新しい産業を起こしたりすることは、地域の住民の力だけではむずかしい現実があります。また、どの小さなまちでも役場のスタッフは膨大な業務を掛け持ちしているの、行政主導で課題解決のために関係人口を呼び込みたくても、ルーチンの業務が多すぎて、関係人口側から見ても楽しそうに見えない「やっつけ仕事」状態になりやすく、結果的に成果の出ない取り組みになることがしばしばです。残念ながら、この状況は日本の大多数の小さな市町村にとって、現実の姿だと考えます。

本事業で、この課題解決に挑戦する5つの小さなまちは、

【北海道八雲町】 人口17,000人。南北海道に位置し、日本で唯一、太平洋と日本海、2つの海をもつ町です。漁業はもちろん、酪農や農業、林業も盛んで、一次産業が元気な街として知られています。一次産業を活かした体験観光や関係人口創出事業が、NPO法人を中核にして盛んに行われています。

【青森県今別町】 人口2,500人。人口減少と高齢化のトップランナーの青森県でも、最も人口減少と高齢化スピードの速い町です。古くから伝わる荒馬（あらかま）まつりの傳承に、20年前から関係人口が取り組んでいて、この町にあるイノシシ牧場は、Iターンした若者が事業承継しました。

【青森県田子町】 人口5,300人の秋田県鹿角市・岩手県二戸市と接する県境の町です。特産のたっこにんにくは国内トップブランドで、地域おこし協力隊の若者が起業し、たっこにんにくの販路開拓や付加価値創出に取り組もうとしています。

【京都府与謝野町】 人口21,000人。与謝野晶子ゆかりの地で、ホップやシルクを活かした新しい産

業創出に、起業した若者が取り組んでいます。

【鹿児島県頰娃町】 人口 11,000 人。跡継ぎのいるまちをつくることを目指して地域の有志が立ち上げた NPO 法人を母体に、関係人口が空き家を次々リノベーションし、そこをビジネスの拠点として移住者を呼び込んでいます。

2.2 関係人口創出・拡大に関わる取組みのビジョン・テーマ設定

今回、5つの小さなまちの中間支援組織が連携して取り組む挑戦をまとめると、『関係人口と小さなまちが、継続的に長くかかわり続けていくために、関係人口とまちの案内人と地域社会と行政が、前向きな姿勢で役割分担を行い、ビジョンを共有し、同じゴールに向かって行動するしくみを創ること』になります。

この5つの小さなまちだけでなく、どこのまちでも、関係人口と地域と自治体の間には、なかなか共有しえない「ほんの小さな」ギャップが存在しています。お互いの立場を理解し、そのギャップをクリアし続けていかなければ、関係人口と小さなまちが継続的にかかわり続けることができません。

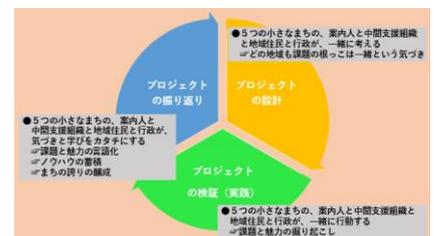
その前提に立ち、似たような課題を抱える全国各地の小さなまちが連携し、中間支援組織とコーディネーターが学びあいを支え、互いに育てあい、次の世代に継いでいくための挑戦を行いました。

3 モデル事業の取組内容

3.1 取組みの全体像・スキーム

本事業の取組みのスキームは、

- ① 地域のかかわりしろを作り続ける力を支援するため、地域と案内人と中間支援組織とコーディネーターが一体となって、「かかわりしろ」をつくるプロジェクト設計とその実践、その振り返りを5地域で繰り返すこと
- ② オンラインを活用し、取組みの失敗事例や作業過程も共有することで。



具体的には、

- 1) ビジョンとゴール共有のための、『オンライン キックオフフォーラム』を1回開催
 - ☞ 「つい、かかわり続けなくなるまち」をつくるために必要なプロセスについて、複数の地域の中間支援組織とコーディネーター、複数の小さなまちの案内人、行政等と一緒に学び、事業コンセプトを共有しました。
- 2) 設計したプロジェクトを検証するための交流プログラムと、振り返りワークショップを、各地

区で各1セット、計5セット開催。

☞交流プログラムは各地の魅力と「もったいない」を体感できるプログラムに設計。1泊2日で実施し、2日目の午後には振り返りワークショップを開催しました。コロナウイルス感染症対策のため、一部内容を変更せざるを得なくなりましたが、計画段階での交流プログラムの内容は以下の通りになります。

北海道八雲町：【NPO法人やくも元気村】が中間支援を担い、基幹産業である帆立貝の販路拡大・担い手育成をテーマにして6月に開催する「世界耳釣り選手権」をステージに交流イベントを実施。

青森県今別町：首都圏等で暮らす関係人口で構成される【おおかわだい好き大作戦】が案内人となり、8月に開催される荒馬（あらま）まつりをステージに交流イベントを実施。

青森県田子町：【合同会社南部どき】が中間支援を担い、農水省農泊推進事業で整備した民俗資料館をベースに、秋田県鹿角市・岩手県二戸市との交流事業を実施。

京都府与謝野町：【株式会社ローカルフラッグ】が中間支援を行い、ホップ収穫とクラフトビールづくりをステージに交流イベントを実施。

鹿児島県頰娃町：【NPO法人頰娃おこそ会】が中間支援を担い、町内で9件の実績がある空き家再生をテーマとした研修と体験ワークショップ型のイベントを開催。

3) 成果報告を兼ねたファイナルラップアップミーティングを1回開催（2/18に開催予定）

☞ファイナルラップアップミーティングは、本事業終了後も続くことになる各地の小さなまちの挑戦について、案内人や将来の案内人候補者、中間支援組織＝コーディネーター、地域住民、行政が一体となって、多様な価値観を共有し続けるための、次の挑戦に向けたキックオフにします。

4) 関係人口事業成果指標検証委員会を設置し、成果検証のモデルをつくるワークショップを実施し成果を共有（2022年3月に開催予定）

☞インパクト評価の知見を有する兼業人材をメンバーに加え、成果検証のモデルをつくるためのワークショップを通年で実施し、関係人口事業を、どのように評価したらいいか研究し、報告します。

5) 5つの小さなまちの中間支援組織と案内人の、合同オンラインミーティングの開催

☞ 来年度以降に横展開を想定している地域の中間支援組織なども巻き込みながら情報交換を行い、ノウハウの共有と信頼関係を構築してきました。

3.2 期待される効果・KPI

関係人口の創出・拡大は、長い取り組みの中で成果が出る性格のものであり、取り組みが一時的なものにならないように、継続可能なしくみを構築し改善し続けていくことが一番大切だと思います。地域のためになる本当の意味での成果は、短期・定量的に分析・検証することだけでは本事業の趣旨に馴染まないと考えますので、

☞交流イベントへの参加人数

平均6名以上 計30名以上

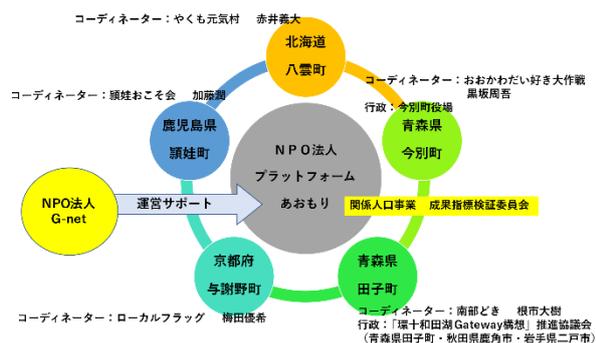
- ☞振り返りワークショップへの参加人数 平均6名以上 計30名以上
- ☞参加者の満足度（WEBアンケート） 80%以上 等を設定するほかに、
- ☞小さなまちでの継続性や発展性を担保し、成果検証の客観性を確保するため、交流プログラムを実施する構成メンバーには、自治体担当者、まちの案内人、将来の案内人候補者、中間支援組織が参画しているか
- ☞1人以上の案内人と複数の将来の案内人が、まちの中に育ったか
- ☞中間支援組織と関係自治体の人的ネットワークが形成されたか
- ☞本事業に参画した5つの小さなまちの中間支援組織を中核に、事例共有と学びあいや、関係人口が継続的にまちにかかわり続けるための伴走支援が可能な連携ネットワークが組成されたかも事業成果目標としました。

また客観的に成果を検証し、今後の指針とするために、八戸学院大学学長特別補佐玉樹真一郎を座長に、『関係人口事業 成果指標検証委員会』を組成し、本事業を検証しました。この委員会では、事業を実施する各地に関係する大学等と連携し、知見を有する兼業人材を呼び込みながら、設定した成果指標が本事業の推進にとって有効だったか、また、どういった指標を設定することが、継続的な関係人口の創出・拡大に有効かについて検証検討し、提言するために活動し、2022年3月に実施するファイナルラップアップミーティングで報告を行うこととしています。

また、その委員会では、案内人の定義・中間支援組織に必要な機能と果たすべき役割の言語化・本事業のインパクト評価 なども取りまとめることとします。

4 事業実施に係る運営体制

4.1 事業実施体制



4.2 事業実施団体及び関係機関の役割

NO	名称	役割
1	NPO法人やくも元気村 赤井義大	八雲町地区中間支援。交流ツアー等のコーディネート、関係機関との連絡調整
2	おおかわだい好き大作戦 周布祐馬・	今別町地区中間支援。交流ツアー等のコーディネート、関係機関との連絡調整

5.3 活動内容① 廃校を活用し、小さなまちにコミュニティセンターを創る

実施場所	北海道八雲町
中間支援組織	NPO法人やくも元気村（コーディネーター：赤井義大）
テーマ	プロジェクトを通じて地域と外の人が長く関わるきっかけ作り
日程	<p>事前ワークショップ（オンライン） 2021年6月7日 19:00～21:00</p> <p>交流イベント&振り返りワークショップ 2021年6月25日～6月26日</p> <p>【1日目】13:00 ゲストハウス SENTO 集合、13:20 キャンプ場（廃校跡地）へ移動、 13:40 各自自己紹介、14:00 キャンプ場作りのためのデザイン会議、 16:00 キャンプ場周辺を散策しながら意見交換、 18:00 夕食を食べながら意見交換&交流会</p> <p>【2日目】8:00 各自朝食、8:40 八雲育成牧場展望台へ移動、 9:15 各地の取組みについて意見交換、12:00 解散</p>
参加者	15名（地域内外の一般参加者7名、他地域のコーディネーター等8名）
参加者からのコメント	<p>・今別町コーディネーター：周布祐馬</p> <p>今回の滞在を通して「将来を担う若者が、自身の産業や地域を時代に合ったものに変えていく最前線の現場」を目の当たりにすることができ、若者のパワーが地域づくりには不可欠だということを実感しました。また同時に、町内外問わず若い年代を巻き込むヒントをたくさん吸収できました。今別町でも今回得た学びを活かして若者が活躍できるプロジェクトについて考えてみようと思います。本当にありがとうございました。</p> 

5.4 活動内容② 空き家再生をフックに、小さなまちに移住者を呼び込むまちづくり

実施場所	鹿児島県南九州市（旧穎娃町）
中間支援組織	NPO法人穎娃おこそ会（コーディネーター：加藤 潤）
テーマ	空き家再生・新規事業創出・移住者の呼び込み

日程	<p>事前ワークショップ（オンライン） 2021年7月26日 19:00～21:00</p> <p>交流イベント&振り返りワークショップ 2021年10月29日～10月30日</p> <p>【1日目】 13:00～14:00 番所鼻自然公園 オリエンテーション・公園内散策</p> <p>14:00～15:50 グループA…番所鼻自然公園にて、取り組みの見学等</p> <p>グループB…西颯娃駅・釜蓋神社の見学</p> <p>16:00～17:30 石垣集落事務所にて意見交換、颯娃での取り組み説明</p> <p>19:00～ 「潮や」にて夕食・交流会</p> <p>【2日目】 9:00～9:15 番所鼻自然公園へ移動</p> <p>9:15～12:00 公園内の岩場にてディスカッション 12:00 解散</p>
参加者	18名（地域住民等10名、他地域のコーディネーター等8名）
参加者からのコメント	<p>颯娃おこそ会 加藤...地域の実践者同士が交流するこのプロジェクトの特徴は、あつという間に参加者間の関係性が深まり会話が始まることで、地域や行政連携における苦勞、地域団体運営と財源問題など、地域で動けば必ず直面する課題について、共感を覚えつつ当事者同士だからこそ深い意見交換が出来たことが大変ありがたかった。また互いに学び合う仲間同士という安心感もあって、当地への若手移住者のふたりにガイド役と取組説明を担ってもらったり、活用に苦戦している海岸ウォークとドラゴンホール体験を実験的に組み入れたりという挑戦もさせてもらったが、良い反応を頂けたことで今後に繋がる手応えを得ることが出来た。来訪された皆さんとの交流があまりに濃厚過ぎたことで、颯娃の若手メンバーがその後のツアー開催地である与謝野、今別、田子へのフルでの訪問を熱く希望し、合わせて彼らの前回来訪が叶わなかった八雲へまで訪問することまで決まるなど、鹿児島からではなかなか繋がり得ない東北や北海道のような遠隔地との双方向型交流が生まれてしまったことにも驚かされた。</p> <p>ホストを経験し、その研修効果の大きさを感じるにつけ、改めてすごいプログラムだと思い知らされた。</p> <p style="text-align: right;">交流イベントに記者が同行した読売新聞の記事📄</p>

新聞記事添付
報告書掲載に
あたり削除

5.5 活動内容③ 小さなまちの課題を活用し、起業した若者が新しいビジネスを創る

実施場所	京都府与謝野町
中間支援組織	株式会社ローカルフラッグ
テーマ	地域の課題を地域資源に変えて、ビジネスを小さなまちに創出する

日程	<p>事前ワークショップ（オンライン） 2021年11月17日 19:00～21:00</p> <p>交流イベント&振り返りワークショップ 2021年11月24日～11月25日</p> <p><1日目></p> <p>13:00 元伊勢籠神社集合 13:30 nest（旧やまよ醤油倉庫）へ移動、自己紹介</p> <p>14:00 ローカルフラッグ事業紹介、阿蘇ベイエリア活性化マスタープラン紹介</p> <p>14:20 阿蘇ベイエリア、産業創出交流センター（コワーキングスペース）見学</p> <p>15:00 地域の事業者との交流 河邊輝王さん夫妻（キッチンカー・アドリアーノ経営）・糸井宏輔さん（織元 丹菱株式会社）丹後ちりめん工場見学</p> <p>18:00 かや山の家へ移動、夕食を食べながら1日のツアーの意見交換&交流会</p> <p><2日目></p> <p>9:00 かや山の家多目的ホールにてローカルフラッグビール事業の説明</p> <p>9:30 「また来たくなる与謝野」をテーマに3チームに分かれてイベント企画会議</p> <p>10:30 グループごとのアイデアを発表、2日間の感想を共有 11:00 解散</p>
参加者	12名（一般参加3名・他地域のコーディネーター6名・事務局3人）
参加者からのコメント	<p>・ローカルフラッグ 高橋</p> <p>与謝野町で活動をしていく中で”当たり前”と思っていたことが実は他の地域から見たら当たり前ではないことを知れた。</p> <p>特にハード面が充実している、行政の方との距離感が近いとの声は意外で自分の町の強みを知ることができた良い2日間になりました。今回のことを踏まえて自分たちはいかにソフトの面を作っていくかが重要と感じたとともに、今持っているビール事業をいかにまちづくりに活かしていくか?といったことが大切とも思いました。</p> 

5.6 活動内容④ 小さなまちの祭りを中核に、関係人口が地域づくりに取り組む

実施場所	青森県今別町
中間支援組織	任意団体 おおかわだい好き大作戦
テーマ	地域の誇りである「荒馬（あらま）まつり」を中核にした地域づくりへの挑戦

<p>日程 (当初計画)</p>	<p>事前ワークショップ (オンライン) 2021年12月8日 19:00~21:00 交流イベント&振り返りワークショップ【中止】</p> <p>【1日目(1/30日)】 集合場所:いまべつ総合体育館(奥津軽いまべつ駅徒歩5分) 集合時間:14:00、14:00-30 ツアーの説明、自己紹介など 14:30-16:30 今別町自慢の“荒馬”を嫌になるまでご堪能いただきます 16:30-17:30 意見交換 17:30 1日目終了 18:00 ころ 懇親会 [宿泊] 体育館併設の宿泊施設 大部屋(和室・男女別) 予定</p> <p>【2日目(1/31月)】</p> <p>8:30 本日の内容説明@和室 9:00-11:00 超極寒の今別町を2度と来たく無くなるまでご堪能頂きます 11:00-12:00 フリートーク@廃校 12:00 全行程終了</p>
<p>参加者</p>	<p>コロナウイルス感染症まん延防止重点措置適用のため、交流イベントは中止し、プロジェクトを検証するためのコーディネーター向け事例勉強会を現地で開催</p>

5.7 活動内容⑤ 【スピノフ】 関係人口創出拡大機運を、周囲に伝播する (全6回)

<p>テーマ</p>	<p>関係人口創出・拡大に向けた「仲間」を増やす</p>
<p>日程</p>	<p>① 2022年1月31日 今別町町民を対象にしたタウンミーティング【中止】</p> <p>② 2022年2月1日 14:30~16:30 外ヶ浜町長関係人口レク 参加者3名</p> <p>③ 2022年2月2日 14:00~16:00 地域おこし協力隊等とのトークセッション 穎娃町コーディネーターの加藤潤氏の取り組み事例紹介と、各地からの参加者とのトークセッション~空き家活用を地域づくりに活かす(オンライン開催) 参加者18名(一般参加12名・他地域のコーディネーター3名・事務局3人)</p> <p>④ 2022年2月3日 中泊町集落支援員向け講演【参加予定町長他52名が中止】</p> <p>⑤ 2022年2月10日 つがる市長及び役場職員向け関係人口講座 参加者14名</p> <p>⑥ 2022年2月11日 外ヶ浜町町民向け 関係人口ワークショップ【中止】</p>

5.8 活動内容⑥ 小さなまちと関係人口が、町の境界を越えて連携する可能性を探る

実施場所	青森県田子町
中間支援組織	合同会社南部どき
テーマ	小さなまちが、県境や町村の境を越えて連携することの可能性を探る
日程 (当初計画)	<p>※コロナウイルス感染症まん延防止重点措置適用期間のため、内容を変更 事前ワークショップ（オンライン）、振り返りワークショップ 【中止】 交流イベント 2022年2月12日 ～冬の地域資源でもある「雪」を活用し、 スノーシュートレッキングを開催。</p> 
参加者	15名（一般参加者12名、事務局3名）

5.9 活動内容⑦ 中間支援組織の拡大に不可欠な「品質基準書」の作成

テーマ	事業成果を、次の年度と次の小さなまちにつなぐための指標づくり
内容	<p>中間支援組織やコーディネーターが、経験値だけに頼らず、また独善的にならずに地域と関係人口をつなぎ、どんな地域にも継続的な関係構築のノウハウや経験を横展開していくためには、コーディネーターのスキルとマインドに関する客観的な評価基準が必要です。</p> <p>私たちは、スキルセット・マインドセットの両面について「品質基準書」を作成し、取組前・取組中・取組後に自身と周囲の評価を加える形で実施できるように運用を整備して、モデルづくりに取り組みました。今年度はコロナウイルス感染症対策のため、完全な形で実施できなかったため、来年度以降、この運用に関する知見を重ね、より良いコーディネート の在り方を創り出すツールにしていくことができます。</p> 

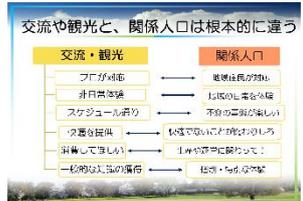
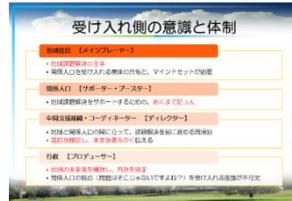
5.10 活動内容⑧ 5つの小さなまちの取り組みを総括し、共有し、次の挑戦に活かす

テーマ	事業成果を、次の年度と次の小さなまちにつなぐ
日程	<p>2022年2月18日 14:00～16:00 講師玉樹真一郎による事業総括とディスカッション</p> <p>関係人口に対するアプローチとしては、デザインのアプローチや EFECTUATION 的アプローチが考えられますが、「わたしだけのやり方＝カン」に頼っている現状がまだまだ多いと思いま</p>

す。本事業では、理念でつながる5つの中間支援団体が、自分自身だけでは言語化が難しい「独自のノウハウ」を見える化するために、信頼関係を持ち合っている外からの視点が不可欠であることを再認識しました。加えて、取り組みを重ねることで、自分達がなぜその地域に惚れているのかを見つめなおすきっかけともなり、また、地域の多様性や魅力を関係人口に伝えるためには、地域を深く把握できていないと難しいことも、改めて自覚することができたと感じています。

一方、小さなまちや地方では、まだまだ関係人口の理解が進んでおらず、関係人口を体感できしか理解できない現状を踏まえると、関係人口とコーディネーターだけの活動ではなく、地域住民を巻き込んだ動きがますます重要になってくる、と総括することができました。

地域住民×関係人口×中間支援×行政の、熱量の積が関係人口創出の成果になる



参加者	他地域のコーディネーター等 12名
-----	-------------------

6 モデル事業としての成果検証

6.1 事業成果（目標達成状況）

事業の目標・達成状況

	目標 (定量目標の場合は目標数値も記載)	達成状況
1	交流イベントへの参加人数 平均6名以上 計30名以上	コロナウイルス感染症まん延防止重点措置適用を受けた期間があるため、すべての交流イベントを実施できなかったが、計3回で45名、1回あたり15名の参加者を得た。
2	振り返りワークショップへの参加 平均6名以上 計30名以上	交流イベントの翌日に開催することで、こちらも計3回で45名、平均15名の参加を得た。
3	参加者の満足度 80%以上	満足度がほぼ100%の回答を得た
4	参加者の構成メンバーの多様性	役場職員や地域の会社経営者、となり町の地域おこし協力隊、新聞記者等、多様な参加者があった
5	案内人の育成	各地の中間支援組織からは、代表者以外のメンバーも参加し、次世代の育成に貢献した
6	中間支援組織と自治体のネットワーク形成	他地域の成功事例を共有し、今後に生かす方策を検討できた

7	各地の中間支援組織の連携ネットワーク	大いに結びつきが強まり、学びあい・支えあう相互メンター的な関係性を醸成できた
8	中間支援組織「品質基準」の作成	マインド評価・スキル評価の両面について、基準を作成した

6.2 事業成果（関係人口の地域とのかかわり方）

人口減少が進む日本において、関係人口が地域と継続的にかかわり続ける文化を醸成するためには、「1人の関係人口が1つの地域だけとかかわり続ける」関係性ではなく、「1人の関係人口が複数の地域（小さなまち）と緩やかなかかわりを持ち続ける」仕掛けを用意することが必要だと考えます。そのためには、地域社会が関係人口の国籍や年齢・性別等にこだわらず多様な関係人口を受け入れる柔軟性を獲得し、中間支援組織（コーディネーター）がその微調整を行うスキームが有効です。

つまり、関係人口創出の推進力は、4つのセクターの共同作業の積で表現することができると思います。『地域の住民の熱量×関係人口の知見や共感×中間支援組織のコーディネート力×自治体などのプロデュース力』であり、どこかのセクターだけが突出しても、サボったり欠落してもうまくいきません。

全国の失敗事例を見ると、『プロデューサーである自治体が、地域の課題を関係人口に丸投げ』や、『地域住民が自治体に依存し、地域の課題を自分ごとと考えていない』や、『関係人口の知見を、「翻訳して地域に活かす」作業を担う中間支援者がいない』などが散見されていることから、中間支援組織のコーディネート力の重要性が、改めて確認できたと思っています。

6.3 事業成果（その他）

同じような地域課題を抱える他地域の小さなまちの中間支援組織やコーディネーターが、ノウハウや悩みを共有し相談することで、相互にメンター的な役割を果たせることが改めて確認できました。

関係人口創出事業のネックになっているのは、まちの当事者（自治体担当者や地域住民など）にとって成功事例や対応ノウハウが、どこかレベルの違うまちの話に聞こえているから、という部分があり、自分たちと同じような小さなまちでも取り組みができる、いつでも相談できる「成功体験はもちろんあるが、失敗事例も多数経験している信頼できる仲間」がいる、というのは大きな心の支えになります。

また、小さなまちで暮らす人たちをリスペクトできる中間支援組織や関係人口を通して、地域で暮らす人たちが自分たちの誇りを再認識する作業こそが、継続的な関係人口創出には不可欠であることも、関係者全員で再認識できたと思います。

6.4 本年度の課題と対応

本年度は、新型コロナウイルス感染症対策のため、実際に地域を訪れてもらう活動が難しい期間が発生し、交流イベントや振り返りワークショップを現場で開催できる期間が半年ほどに制限されました。

その中でも、「関係人口という概念が、地域住民に浸透しきれていない、正しく理解されていない」「市町村においては、移住対策が優先され、関係人口創出の政策優先順位が低い」などの状況を把握することができました。

しかしながら、地方において、Uターン以外の移住者を奪い合うことの難しさはさらに深刻度を増していて、関係人口創出の考え方の浸透が、これからの地域づくりにとって一段と重要になると考えます。

私たちは、中間支援組織とコーディネーターと地域社会や自治体がともに育てあう関係性を創っていくことが、今後の関係人口創出の大きなポイントになると考えています。

6.5 今後の事業のあり方

私たちは、関係人口を全国各地に創出し、存在価値が認められ拡大していくためには、中間支援組織やコーディネーターの存在が不可欠であると考えています。そのために、人口規模の大きな自治体ではなく、大企業の主導に頼らずに、小さなまちで「つい、かかわり続けたいくなる関係人口」と、まちの案内人や地域住民とのつながりを創り出し続ける、『中間支援組織とコーディネーターを育て継ぐ』ことの可能性に挑戦してきました。

この事業を通じて、関係人口創出に必要な中間支援組織を継続的・自立的に運営するためには、活動資金の獲得ノウハウを共有するしくみを用意し、補助金や助成金だけに頼るのではなく、中間支援組織同士が支えあえるネットワークを強化することが必要だと考えます。

また、地域で暮らす人が地域の課題を自分のこととして認識するために、自分たちが暮らす小さなまちと同じような境遇のまちで暮らす人たちの、地に足の着いた取り組み事例を実体験として得ることは、継続的で前向きな行動を促し広めていくために不可欠なプログラムだと思います。

7 自立化・自走化の検討

7.1 互助会的ECサイト

私たちは、自立化の最大の壁である活動費用の獲得について、本事業で試行を行いました。

地域企業と中間支援組織が理念を共有し、互助会的に商品購入と利益分配を行えるECサイトの仕組みを用意し、本事業内でテスト稼働させ、来年度以降は、全国各地の中間支援組織（NPO法人ETICが中核となっているチャレンジコミュニティに所属する、全国約50団体）と一緒にこの仕組みを活用し、自立化・自走化のための資金調達に貢献したいと考えています。

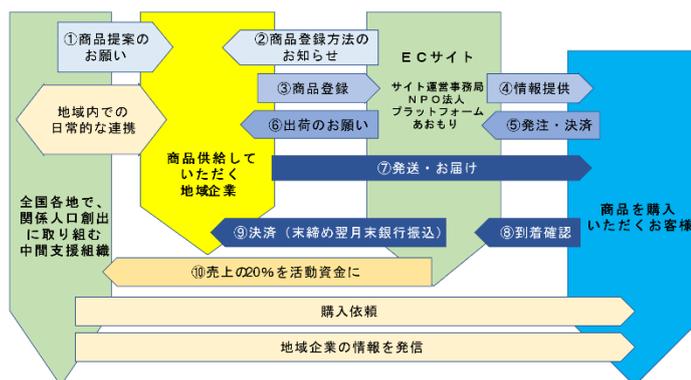
コロナウイルス感染症対策のためスケジュールが来年度にずれ込みましたが、2022年4月には本格稼働することとしています。



チャレンジコミュニティ

デモサイト URL

: <https://platform-aomori.myshopify.com/>



8 他地域への横展開の可能性の検討

8.1 コーディネーター相互メンター制度

中間支援組織が、そのスキルやマインドを高く保つためには、同じような課題を抱える地域と学びあい、課題に取り組む実践者同士が、相互にメンターとしての役割を果たし、プロジェクト設計→実施→振り返りを繰り返すことが有効であると考えます。本事業で獲得した知見やノウハウを、チーム

として共有し、活かしていくことが有効になります。

主なメンター候補	所属	得意分野
玉樹真一郎	八戸学院大学学長特別補佐	事業コンセプト設計
中村圭二郎	面白法人カヤック SMOOUT 担当	全国各地の関係人口創出事例の紹介
加藤潤	NPO 法人頼娃おこそ会	廃校や空き家等の活用を単体ではなく、前後のソフト事業的な取り組みとパッケージで提案

その他、各地区のコーディネーターがそれぞれの知見をプロボノ的に提供しあう

8.2 中間支援組織やコーディネーターの「品質基準」づくり

中間支援組織やコーディネーターが、独善的にならず地域と関係人口をつなぎ、どんな地域にも継続的な関係構築のノウハウや経験を横展開していくためには、コーディネーターのスキルとマインドに関しての客観的な評価基準が必要だと思えます。

私たちは、本事業を通じて「品質基準書」を作成し、スキルセット・マインドセットの両面から、取組前・取組中・取組後の評価を自身と周囲の評価を加える形で実施するモデルづくりに取り組みました。

これをさらにブラッシュアップして共有することで、他地域へ関係人口創出事業を横展開する際に、中間支援モデルを一定レベルに保つことに貢献すると考えています。

スキルセット	説明	キーワード	1 (実践しているか)	2	3 (成功体験をつめているか)	4	5 (再現性があるか)
地域理解	地域の文脈(歴史/地誌/産業/人口動態/生活様式など)を把握・分析・構想する能力		この一帯は一年前の人口動態は産業関係者も見ていないか? また、その関係者は最新のデータで更新されているか?		地域の文脈も読み、支援する対象も決めているか? また、その社会・文化などが影響するかな?		自分なりは地域の事業性を検討し、そこから派生して支援する対象も決めているか?
コンサルティング(対個人)	企業ニーズに対して事業の戦略設計や、適切なアドバイスを行う能力	ビジネスモデルキャンパス、アソシエーション、情報収集、翻訳	経営者としてだけでなく、経営(企業)のニーズを捉えることできるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?
コーチング(対個人)	企業や学際を対話し、明確な目標を設定し、明確な行動計画を立てる能力	多様な関係者の関係、企業や学際的な関係、各個人が持つ事業や問題と共通する関係、自分と会社の関係、など複数の視座から事業を捉えているか?	コーチングとしてだけでなく、経営(企業)のニーズを捉えることできるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?
プロジェクトデザイン	企業課題に繋がる設計する	一人のプロフェッショナルとして、対象以上の価値提供ができるよう準備を怠っていない。また、それが他者からも認識され、協力の意思を持ってもらえている。	プロジェクトとしてだけでなく、経営(企業)のニーズを捉えることできるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?
ラーニング	企業も学際も学ぶ		経営者としてだけでなく、経営(企業)のニーズを捉えることできるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?
可能性を促す	自分も含め企業側にはより良くなるための方法を考え、自分も実践している。自分も実践している。自分も実践している。		経営者としてだけでなく、経営(企業)のニーズを捉えることできるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?
挑戦こそ価値	挑戦的かつ挑戦的でないことになり取り戻すことがない。挑戦的でないことになり取り戻すことがない。		経営者としてだけでなく、経営(企業)のニーズを捉えることできるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?	経営者から依頼された経営課題を解決できるか?